

2017.8.26

地軸

「われわれは、海に浮かぶ小舟。揺れているときに無理に解決しなくていい」「変えられないことは受け止めるしかない」

その「外来」は、心安らぐ紅茶の香りが漂う気がした▲樋野興夫順天堂大教授の講演を松山で聴いた。命の悲しみに向き合わざるを得ない病とつき合つには哲学的な考えが必要、と9年前に「がん哲学外来」を創設。取り組みはメディカルカフェなどの形で全国に広がる▲医療者と患者がお茶を飲み、語り合う。それだけで「何の解決もしてなくても（不安や痛みを）解消には向かえる」。「自分の中に（他者がたくさん水を注げる）頑丈な空っぽの器を作ることが人生」とも。どの言葉がどう「効く」かは受け手次第▲失われた多くの命を悼む慰霊の8月。がんに限らず、誰しも哲学的、自省的なもの思つ今の時季、樋野さんに教わつたこんな言葉をかみしめる。「涙とともにパンを食べた者でなければ、人生の味は分からない」（ゲーテ）▲正岡子規は、友人への書簡にこうつづつた。「体が痛むとて泣き、昔を想ふて泣き、未来を想ふて泣く。…併し泣きながらも猶大食致居候」（復本一郎「正岡子規 人生のことば」岩波新書）。苦悩の中にもユーモアを忘れない強さ、人生の色濃さを思う▲「病気は人生の夏休み」と樋野さん。立ち止まって生きる意味を考え直すには「冬休みでは短すぎる」と笑つた。それぞれに思いをはせたい、夏休みの哲学。